

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	佐藤雄亮
論文題目	前期レフ・トルストイの生活と創作—「内なる女性像」から生じた問題とその解決を中心に—
<p>本学位請求論文は、「はじめに:アプローチと仮説」、「先行研究」、第1部「カフカス」、第2部「1812年と『戦争と平和』」、第3部「アンナ・カレーニナ」、「結論」という構成をとっている。ここで扱われているのは論文題目にあるように前期レフ・トルストイの作品群と、それと密接に関わる作家自身の生活と世界観である。レフ・トルストイは作家であると同時に思想家でもあり、それは後期のいわゆる「トルストイ主義」に明確に定式化されているが、本論文は、前期トルストイの創作を作家の生活と世界観との関連において統一的に捉え、それが後期トルストイの歩みがそこから発する必然的なプロセスであったことを示している。</p> <p>まず著者は「はじめに:アプローチと仮説」において自らの研究の立脚点を示す。著者はここで前期トルストイの生活と思想、そして創作は、幼くして両親を失った作家が抱いた、失われた幼年時代の愛と調和の世界の再建という課題、そして理想の女性像の追求と密接に結びついている、という仮説を提起する。トルストイはカフカスの山岳民、コサックやジプシー、農婦といった生命力溢れる女性に惹かれていたが、それは貴族トルストイにとっては必然的に深刻な倫理的・社会的問題を突きつけることになった。更に問題を複雑にしたのは愛と調和に満ちた家庭願望の強さであった、とする。</p> <p>「先行研究」は「トルストイの主な評伝について」と「マルクス主義的、歴史主義的トルストイ」から成り、著者はそれまでのトルストイ論を概観しつつ、トルストイの女性観という視角からのアプローチは、トルストイの神格化を破壊しかねない危険性をはらんでいるために今まで殆どなされてこなかった、と指摘しているが、そこにこそ本研究の意義があるといえよう。</p> <p>第1部「カフカス」は以下の12章から構成されている—第1章「『幼年時代』における終生のテーマ」、第2章「ヤースナヤ・ポリャーナ前史」、第3章「トルストイのほんとうの生い立ちは?」、第4章「大学時代」、第5章「帰郷からカフカス行きまで」、第6章「『襲撃』」、第7章「『森を伐る』」、第8章「カフカスの高みとは」、第9章「理想の女性像」、第10章「袋小路」、第11章「現実そのものを変える」、第12章「農婦の愛人」。</p> <p>これらの諸章におい著者は『幼年時代』、『襲撃』、『森を伐る』などの作品に丹念な分析を加えつつ、幼年時代から大学時代、帰郷とカフカス体験に至るトルストイの生活と創作の過程を丹念に跡付け、農業経営と教育活動に取り組み、農夫の愛人アクシーニャとの関係に苦しむトルストイの内面にも考察を加える。</p> <p>第2部「1812年と『戦争と平和』」は大きく「I 1812年」、「II 『戦争と平和』論:夢と夢の出会い、そして生命の誕生」、III「作者の逸脱」と視点の問題」から構成されており、ここでは、畢生の大作である『戦争と平和』の執筆が、トルストイがそれまでの創作と生活で味わった、理想と現実の乖離を、過去の歴史的時空間において統合しようとした試みととらえる。そのためにトルストイは歴史的事実を大きくデフォルメすることもためらわなかった、として、ここでは作品と歴史とを対比するために膨大な資料を駆使し、ナポレオン戦争の実像に肉薄している。</p> <p>最初の「I 1812年」は次の14章と結論からなる—第1章「ナポレオンはなぜロシア遠征を敢行したか?」、第2章「ナポレオンのロシア侵入からスモレンスクの会戦まで」、第3章「スモレンスクからボロジノまで」、第4章「ボロジノの会戦」、第5章「祖国戦争後半の焦点」、第6章「ボロジノの会戦後の退却からモスクワ放棄まで」、第7章「フィリの軍議」、第8章「露軍がモスクワを放棄し、仏軍が入場」、第9章「モスクワの大火」、第10章「犯人はだれか?」、第11章「モスクワからタルーチノまで」、第12章「タルーチノで日々力関係が逆転」、第13章「「ただ逃げること」の難しさ」、第14章「トルストイによる祖国戦争の歪曲と真実と」、結論「祖国戦争の真実と夢」</p> <p>Iにおけるこれらの考察によって著者は、まず歴史学的な視点から、膨大な資料を駆使しナポレオン戦争の</p>	

実像に肉薄し、IIとIIIの作品論の基礎としているが、その縁密な歴史的考証は、それに続く『戦争と平和』論に大きな説得力をもたらしている。

第3部「アンナ・カレーニナ」は以下の7章からなる—第1章「トルストイは「殺人者」か」、第2章「「アルザマス」の一夜」と、もう一人のアンナの鉄道自殺」、第3章「「女性的なるもの」を殺し、葬る」、第4章「ブラックホールとしての世界」、第5章「アンナ・カレーニナの愛のドラマ」、第6章「『見知らぬ人』はアンナ・カレーニナか?」、第7章「後期トルストイへの序章:『復活』とはどんな作品か」

この第3部で著者は、トルストイは『アンナ・カレーニナ』において、彼の理想的女性像を描き出し、同時にそれが現実には不可能であることを描き出した、とする。作品は成功したが、内的世界において挫折したトルストイは、転機を迎え『懺悔』を経て後期トルストイの道を歩むことになる。

「結論」において筆者はそれまでの考察をまとめて、本論の対象とした諸作品は、一見内的関連がないように見えるが、実はトルストイの一貫した内的志向に貫かれていることを説得的に示している。

現実世界の課題を文学作品で検証し、得られた結果をまた現実生活で検証する、というトルストイ独特の創作と作品の関係を詳細に検討した本論文は、著者ならではの独自の読みを貫くことで、さまざまな創見に満ちており、審査委員会で高く評価された。またモスクワ在住という恵まれた条件が、未発表資料の獲得や現地ロシア人研究者との直接の交流による新たな知見を生み出していることも特筆すべきである。

以上の内容によって本論文はトルストイの研究史において、その方法においても結論においても今後無視できないユニークな指標の位置を占めるものと考えられる。よって本論文は博士の学位を授与するに相応しいものである、と評価するものである。

公開審査会開催日	2016年 1月 23日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院教授	伊東一郎	ロシア文学・ロシア文化史	
審査委員	大阪外国語大学名誉教授	法橋和彦	19世紀ロシア文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院准教授	坂庭淳史	19世紀ロシア文学・ロシア思想史	文学博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院教授	源貴志	日露比較文学	
審査委員				